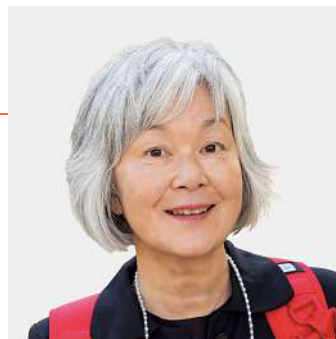


月の光に見えない糸が

詩人・翻訳家 山崎佳代子

やまさき かよこ



撮影：Jasminka Nadaškić Dorđević

木曜日、空に教会の鐘が鳴りわたる。バニヤ・ルカ(ボスニア・ヘルツェゴビナのセルビア人共和国首都)の秋は、プラタナスの並木道が美しい。救世主ハリストス聖堂を一人で訪ねた。早課と呼ばれる朝の祈祷が終わると、誰かが私を呼んでいる。振り返ると、仲良しのヒルダだった。固く抱き合う。どうしてここにいるのと驚いている。「国際文学の出会い」に招かれ、詩の朗読に来ているの、と答えると、「私たち、土曜日に結婚するの。ぜひ、結婚式に出てちょうだい。お願い。披露宴にも来てね。きつとよ。こちらがドラジェンです」と、恋人を紹介する。はにかむように、彼女に寄り添っている。優しそうな人だ。詩祭は金曜日に終わる。ベオグラードに帰るのが、一日遅れても構わない。計画の変わる旅こそ、本物の旅なのだから。「それでは土曜日に」と、握手を交わす。ヒルダたちは喜び、婚礼の打ち合わせをするため司祭館へ去った。ヒルダはシリア人、彼はボスニアのセルビア人。国際結婚だ。



ヒルダと会うのは、これで3度目だが、私たちは見えない糸で強く結ばれているのに違いない。

道女テオドラはつぶやいた。翌朝の奉神礼では、ヒルダがアラブ語で祈りの歌を歌った。聖堂に響きわたる力強い声だった。

2度目にヒルダと会ったのは一昨年の秋、ヤセノバツツ女子修道院だった。第2次世界大戦のとき、この村には巨大な強制収容所が設営され、セルビア正教徒、ロマ人(ジプシー)、ユダヤ人などが大量に虐殺された。9月13日は、犠牲者を記憶する聖日で、振り香炉から乳香が漂い、ヒルダはセルビア語で祈り歌を歌った。澄んだ歌声が、私の胸にしみこんだ。別れ際に彼女は幸せそうに言った。恋人がいるのと……。

いのメッセージを書き、私は首から生神女(聖母)のメダリオンをそっと外すと、小箱に入れた。ヒルダに贈ろう。

土曜日は美しく晴れた。聖堂の螺旋階段を上り、私はバルコニーの聖歌隊に入れてもらう。いよいよ新郎新婦が現れた。シャンパン色のウェディング・ドレスに銀のティアラのヒルダは女王様、タキシードのドラジェンは王様みたい。婚配機密の儀式が始まる。アレッポから、彼女の父母、兄と姉の家族もやって来た。幼子たちも一緒だ。姉は乳飲み子を抱いている。イスラム教徒によるキリスト教徒の迫害は激しさを増し、危険な旅だったと聞いた。

ドラジェンの家族も、ユーゴスラビア解体の内戦で、戦場となった故郷からオーストリアに逃れ、何年か難民生活を送っていた。第2次大戦のときには親族がヤセノバツツ強制収容所に送られて亡くなったと聞いた。

グラーツから彼の家族や友人たちが到着する。あつ、ジチャ教会からは、修道女テオドラが来ている。あの穏やかなほほ笑みと瞳の光。聖歌隊の若い声はみずみずしかった。シリアからも男性の詠隊が来て、アラブ語の祈りの歌を歌った。深い声だった。新郎新婦の指輪の交換が終わると、父親はヒルダに贈り物を渡した。威厳のある立派な人だった。ヒルダが赤い小箱を開くと、家宝の金貨が光を放ち、聖堂はどよめいた。彼女は涙を流し、父としっかり抱き合う。それを聖歌隊の少女が、うっとり見つめている。

歴史の闇の中で、見えない糸は人と人を固く結ぶ。その糸はとても細いが、たやすく切れたりほしくない。その晩は満月で、人々の踊りの輪が眩しかった。



金曜日は、「文学の出会い」の仲間と、険しい渓谷をたどってブルバス川の上流の村を訪ねた。森の奥の滝が飛沫を上げ、清流がきらめいている。水車小屋が並び、石臼の回転する音が心地よい。小麦粉やトウモロコシの粉がかすかに香る。この辺りは、かつてユーゴスラビア内戦の激戦地だった。ドラジェンの故郷もここから近い……。その晩、お祝

時の調べ Essay

略歴
1956年静岡生まれ。エッセイ集に『ベオグラード日誌』(説売文学賞)、『パンと野いちご』(紫式部文学賞)、『ドナウ、小さな水の旅 ベオグラード発』など、詩集に『黙然をりて』など、訳書にキシュ『若き日の哀しみ』など。白石かずこ選詩集をはじめセルビア語による著書多数。文学博士(比較文学)。ベオグラード在住